

夏

といえは祭りである。と言っても日本では、核家族化やコミュニティの崩壊などのせいで、祭りを支える素地は昔に比べると、すっかり弱体化してしまった感がある。新興住宅地の祭りなど、祭りとは名ばかりで、子供たちを引きつけようとアニメのキャラクター御輿みこしを作って、その主題歌を流しているなんてものも珍しくない。

では、伝統的な祭りはどうかというと、こちらも観光と絡めた商業主義が鼻につくものが少なくない。商業主義が悪いとは、

言わない。だが、興ざめなのは見物客を意識した過剰なまでのサービスや演出である。美

女によるパレードがあったり、関係のないライブがあったりと、見物客を楽しませるための過剰なまでのサービスの数々。たしかにイベントとしての祭りを盛り立てるためには、いまの若い人にも受け入れられるような「わかりやすさ」が求められるのは当然かもしれない。しかし、一方で、こんなに祭りがわかりやすくなっていいものなのだろうか、とも感じてしまつた。たしかにイベント化した祭りは人を呼べるだろうし、大量の収益を得ら

れるのかもしれない。

しかし、プラス面の効果を考慮してマーケティングされたものを「祭り」と呼ぶのには、どうも抵抗を感じてしまう。というのも、本来、祭りとはコントロール不能であるところに、その魅力があった気がするからである。人間の合理的な意識や思考では図りがない存在に、その場を託してしまう。それによって生じる予想しがたい事態を共有するというのが、祭りのもともとのあり方だったのではないか。

旅の曲者

42

祭りが始まるとき

文・写真 / 田中真知 Tanaka Mochi

イラスト / bozen

そんなことを思うとき、きまつて思い出すエピソードがある。フランス・コッポラ監督が映画「地獄の黙示録」を撮影していたときの逸話である。ベトナムを舞台としたこの映画には密林に住む現地の村人たちが大勢エキストラとして出演している。ところが、撮影のスケジュールが、彼らの村の祭りと重なってしまった。その間、撮影を中断しなくてはならなくなった。俳優のスケジュールの都合上、撮

影をあまり延ばすわけにはいかなかった。スケジュール調整を担当していたコッポラ夫人のエレノアは、祭りがいつからいつまで続くのか村人に尋ねた。しかし、どの村人に聞いても「わからない」という。エレノアが、そんなのはおかしい、どうして自分たちの祭りなのに、いつ始まるのかわからないのかと食い下がる。と、村人は「祭りがいつ始まるかは、わからない。祭りの時はむこうからやってくるのだから」と答えたという。彼女がその意味を悟ったのは、それから数日後だった。その晩、村人

たちの間に、いつもと違う気配が広がっていた。潮がひたひたと満ちていき、あたりの空気が濃密さを増していくような感覚だった。そして、その晩、遅く、祭りは唐突に始まったというのである。誰かが今晩、祭りを始めるからと合図したわけではない。村人たちはひたすら、いわば時が満ちるのを待っていた。そして祭りに参加する村人たちの気持ちと場の雰囲気が一瞬になったときに、祭りはおのずから始まったのだとエレノアは述べている。



同じような経験を、ぼくもしたことがある。バリ島のある村のヒンドゥー寺院の夏の祭礼を見に行ったときのことである。この祭礼は突発的に、参加者たちの集団トランス現象が起きることで知られていた。その日、すでに寺院の境内は参拝者でいっぱい、ガムランの規則正しくらびやかな響きと、香の匂いが、正装して境内に座っているバリ人の間を満たしていた。バリの聖獣であるバロンや魔女ランダの像が祭壇に鎮座し、バロンの胴体を飾る無数の金属片が真昼の日差しにきらめいていた。

案内してくれた友人の話では、こうして座っていると何か特別なきっかけもないのに、突然、臨界点に達したかのように前触れもなく集団トランス現象が起きるのだという。しかし、疑り深いぼくは、どうせ、あらかじめ約束事ができていて、何かの合図で、皆がトランスに陥ったふりをするのであろうと、身も蓋もない見方をしていた。境内にやってきて三時間近くが経過していた。経文を唱える声が朗々と響き、香に満たされた境内の大気を切り裂くようにガムランが小刻みなリズムを叩き出していた。ところが、そのとき、ふと自分の聴覚が妙にひずんでいるのに気がつ



バリ島の村の祭礼。祭壇には果物やお菓子が供えられ、ペンジョールと呼ばれるのぼりが空を彩る

いた。音の距離感がうまくつかめないのだ。風景の見え方も先ほどと違う。境内にひしめく群衆も、色鮮やかにそびえるのぼりも、バロンの像もはっきりと見えているのだけれど、その色や形が怖いような存在感をもって迫ってくるのである。これはおかしいぞ、と思っていると、いつのまにか喉の奥や皮膚の表面にざわつくような、むずむずする感覚が広がってゆく。

その感覚はガムランの音に促されるかのように全身をじわじわと満たしていく。このまま、この感覚に身を委ねていたら、大変なことになりそうな気がしてきて焦った。ほくはあわてて水を飲み、深呼吸を繰り返し、ガムランが聞こえないよう耳をふさいだ。

深呼吸を続けているうちに、ふつふつとのぼってきた感覚は少しずつ鎮まり、やがて静かになった。と、そのときだった。一瞬の静寂のあと、すぐ前にいたバリ人の男が雄叫びを上げたかと思うと、境内のあちこちで人びとの悲鳴と咆吼（ほうこう）が上がり、トランスの波が群衆を飲み込んだ。

ぼくは寺院の壁際に避難して、目の前に練り広げられる異様な光景を息を詰めて見つめた。地面をのたうち回る人もいれば、頭をかくがく震わせて飛び跳ねている人もいる。しかし、恐ろしかったのは、あのまま自分の内にわき上がってきた感覚に身を委ねていたら、自分もまた確実にこのトランスの群れの中に入っていたということだった。

だが、祭りの時が満ちるとは、こういうことなのではないか。それは何時に始まり、何時に終わるといふふうに、あらかじめスケジュールではなく、本人すら知らぬ間にじわじわと内側を満たしていく。その「時」が、人をどこに連れて行くのかはわからないけれど、そうした感覚に身を委ね、祭りの場が熟していくのを体験するとき、祭りの本来の力が発揮されるのではないか。トランスに陥らなくてほっとしていた反面、この濃密な祭りの力を保っているバリの人たちにうらやましさを感じたのは事実であった。



田中真知

たなか まち

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に『アフリカ旅物語』（北東部編・中南部編、凱風社）『ある夜、ピラミッドで』（旅行人）、訳書に『グラハム・ハンコック』『神の刻印』（凱風社）、『惑星の暗号』（翔泳社）など。